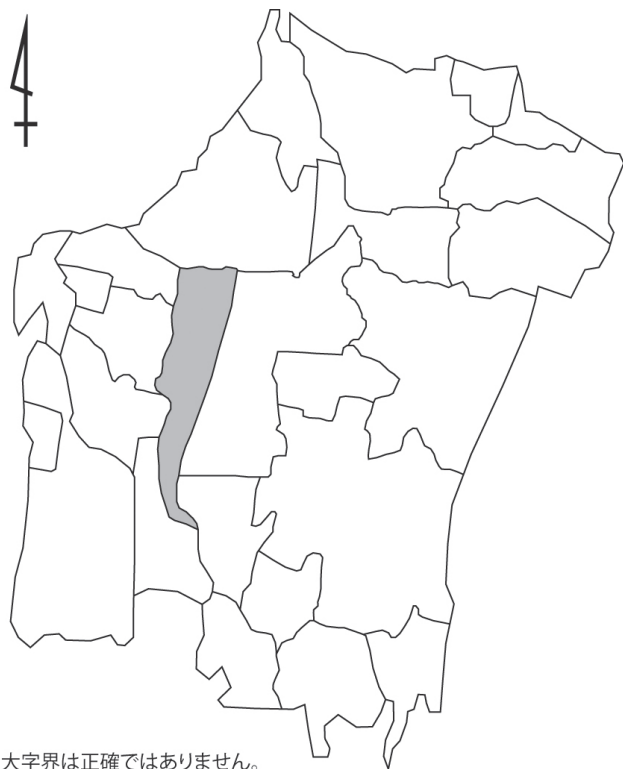


# 郷土かみのかわの歴史・文化財

## 上三川の地域と歴史 川中子

川中子は、町域の中央部西寄り、田川左岸の低地に位置しています。東は上蒲生、西は田川を隔てて上神主・下神主・大山・梁と接しています。地区内を田川・赤沢川・温川が南流しています。川中子の地名の由来は、この3本の河川の内側に拓けた集落の意といわれています。

江戸時代の天保郷帳には、「古者川中子村・上落合村・中落合村・中丸村・小糠内村・鍛冶内村・下川中子村七ヶ村」とあり、それぞれが鎮守・脇鎮守を祀り、小さな集落を形成していました。惣鎮守の熊野神社は、鍛冶内村内に鎮座しています。各村の地縁的結束は強かったといわれています。



※大字界は正確ではありません。

ています。川中子村は、これら七カ村の総称でした。江戸時代の初めは鳥山藩領で、のちに幕府領となりました。村内の家数は、文化12年(1815)は65戸、天保年間(1830)1844は48戸です。慶安郷帳には、当時の田畑高が記録されており、大麦・小麦・荏胡麻・木綿などが作られていたことが分かります。また、農作業の合間に男性は薪を作り、女性は木綿を織って賃金収入を得ていました。田川の豊富な水量を利用して、水車商売を営む者もいたそうです。

た。そのため、村の困窮は甚だしく、たびたび助郷役の免除を願い出ていました。さて、字上落合には和泉守親綱が築城した落合館があったといわれています。親綱は、建長元年(1249)に上三川城を築いた横田頼業の玄孫です。落合館は代々親綱の子孫が継承し、慶長2年(1597)の宇都宮氏改易に伴い、所領を返上して帰農しました。

館は、田川左岸の低台地に位置しており、北西に稲荷神社、北東に多賀神社がそれぞれ氏神として祀られています。西側にはかつて川が流れており、田川とともに自然地形が防御の役割を果たしていました。

なお、当時の年貢の割付と上納の状況を記録した「川中子村年貢割付状」は、町の指定有形文化財となっています。川中子村は、大名行列の通過などの折には、石橋宿の助郷役を課されました。川中子村に限ったことではありませんが、小さな農村にとって人馬提供は大きな負担でした。時には、人足約90人・馬約40頭もの労役を割り当てられ、足りない人馬は賃金を払って他の村から雇っていました。

川中子に落合館はもうありませんが、中世から近世にかけての歴史は色濃く残っています。

川中子に落合館はもうありませんが、中世から近世にかけての歴史は色濃く残っています。



田川から臨む川中子 (奥は落合館があったといわれる地)